

研究成果展開事業
共創の場形成支援プログラム
育成型

終了報告書

「アシルートイタによる心と体に響く新しい食の価値
共創拠点」

プロジェクトリーダー	氏名	徳樂 清孝
	所属機関	国立大学法人 室蘭工業大学
	部署	クリエイティブコラボレーションセンター
	役職	センター長

2024年4月

1. 拠点ビジョンの作り込み

育成型開始当初の拠点ビジョン“アイヌの知恵が導く、人々が集い住みたくなる豊かな「食のまち」”を作りこむにあたり、「人々が集い住みたくなる豊かな食のまち」とはどういうまちなのか、白糠町全世帯アンケートおよび白糠高校全校生徒アンケート、一次産業従事者をはじめとする地域住民の個別ヒアリング、3回にわたる白糠未来共創会議や2度の泊まりがけの合宿など、地域での徹底的な意識調査と議論を行なった。その結果、白糠の方々、特に未来を担う若者たちは、他の地域と比較して「人間関係」と「幸福感」をととても大切にしていることが明らかになった。人口減少が進むこの町で、人々が食を生業として住み続けるためには、単に付加価値の高い食材を作る、あるいは安く作るといったことだけでは十分ではない。地域の豊かな風土と文化から生まれる食を介して、作り手は食べ手のために、食べ手は作り手のために、お互いを感じ必要とし合いながら幸福度が最大化するコミュニティをつくらなければならない。これこそが経済とウェルビーイングが両立した10年後のありたい豊かな白糠像であるという考えに行き着いた。これらの議論をもとに、新たな地域拠点ビジョンを“アイヌに学び、地域に学び、幸福度を最大化する「食と食材のまち」の実現”とした。

2. 拠点ビジョンからのバックキャストによるターゲット・研究開発課題の見直し

拠点ビジョンの作り込みによって新しく設定した地域拠点ビジョンを実現するため、2023年7月に泊まりがけで実施した2回目の拠点合宿にて、バックキャストによるターゲット・研究開発課題の見直しを行なった。この見直し案を企画運営会議のメンバーで議論し、新しい拠点ビジョンに対するターゲットとして以下の3つを設定した。ターゲットを達成するために育成型の研究開発内容を改訂すると共に、本格型へ向け6つの研究開発課題を設定した。

1. つながる –信頼でつながる幸福コミュニティ–
2. つたえる –食の価値の可視化とナラティブ表現–
3. つくる –地域独自のこだわり食材–

3. 運営/研究体制とマネジメントの仕組み構築（持続可能性の具体化含む）

拠点運営のための場として、代表機関を中心とした「アシルトイタ」拠点運営機構を立ち上げ、その中に全体運営の協議の場である企画運営会議、知財や契約を検討する知財／連携会議、人材育成の制度やしくみを検討する人材育成会議、各課題の進捗について共有する研究推進会議の4つの会議を設置した。これにより、目的及び課題に応じてタイムリーに相談・検討できる場を整備した。地域共創の場として、産学官のステークホルダーが集い、地域拠点ビジョンを策定する白糠未来共創会議を設置し、地域拠点ビジョンの達成に向けた計画の進捗確認と拠点活動の支援、およびビジョンの見直しを行った。その拠点として、北海道教育委員会の協力も得て白糠高校に室蘭工業大学白糠町サテライトオフィスを設置した。なお、道立の高校内に大学のサテライトオフィスを設置することは初めての取り組みである。

2022年度の産学官連携マネジメントについては、代表機関内にある地方創生研究開発センターの協力を得て、アシルトイタ拠点運営機構に設置した知財／連携会議で行った。同センターは、産学官金連携部門（研究シーズとニーズのマッチング、共同研究等の支援）、事業化促進支援部門（研究成果の事業化支援）、知的財産部門（知的財産の創出、活用支援）の3つの部門より構成され、地域社会の「知の拠点」として社会貢献を推進しており、これらの専門チームサポートを受ける

ことで円滑に手続きを進めた。2023 年 4 月には地方創生研究開発センターを改組し、地域創生エコシステムを構築・運営するオフィス群とアジャイル型タスクフォース群から構成される「**MONO づくりみらい共創機構**」を新たに設置した。本機構は、学長を機構長とする全学組織体制を組んでおり、新たに共創のヘッドクォーター機能を担う「**地域共創オフィス**」、社会的インパクトを評価し、地域やステークホルダーとのリレーション機能を担う「**パブリックリレーションズオフィス**」、知財運用、研究シーズとニーズの解析やマーケティング、スタートアップの創出支援を担う「**リエゾンオフィス**」を設置し、地域との共創の促進にあたってこれまで不足していた機能強化を図った。拠点の事業構想・開発フェーズから社会実装フェーズまでを、**MONO づくりみらい共創機構**がシームレスにサポートすることで、拠点自立化/持続化を支える体制を整えた。

4. 研究開発課題の成果

課題 1 では、一次産業従事者、地域住民、高校生など様々なステークホルダーの方々との対話の中から、人々の活動や、歴史的、文化的観点も盛り込んだ『食物語』の基本構成を分析し、食物語を構成する 3 つのナラティブ、環境や歴史に培われたこれまでの暮らしに関する【不変のナラティブ】、現在の暮らしに関する【活用のナラティブ】、未来の暮らしに関する【未来のナラティブ】を定義した。**課題 2** では、白糠町に自生する植物やその栽培物のアミロイド凝集阻害活性評価、オートファジー活性化能評価、核内受容体レポーターアッセイを実施し、高付加価値食材としての可能性がある複数の食材を見出した。また、オルガノイド技術とイメージング技術を融合した、タンパク質変性疾患の進行予防／発症予防に寄与する新しい評価技術を開発し特許出願した。**課題 3** では、白糠町特有の土壌に合わせた作物の栽培、生産、加工法の検討など、地域独自の『食物』を生産するために必須となる技術を開発した。具体的には、白糠町の農業法人、新規就農者と協力し、2022 年度は 7 種計 2000 株、2023 年度は、28 種 1500 株の苗を栽培、機能性の評価や加工法、調理法の検討を行なった。**課題 4** では、流通通貨との兌換性がなく、人と人との繋がりを示す新しいトークン「Asirtie（新しい絆）」の概念を確立、特許出願するとともに、この概念を持たせた web アプリ PoC 版を作成、使用を開始した。

5. 今後の活動について

育成型の活動を通じ、食に関する 3 つのナラティブの定義、素材の新しい評価法の開発、地域に自生する付加価値の高い植物の選抜や栽培法および加工/調理法の開発、人と人との繋がりを示す通貨との兌換性がない新しいトークンの概念を確立しそれを実装したアプリを開発するなど、拠点の駆動に資する様々な科学技術を開発してきた。一方で、高校生などの若者を含む地域住民との活動の中で、地域の人々は経済的に豊かであることはもちろんのこと、人間関係も含む幸福感を大事にしていることが明らかになった。食料生産を担う多くの地域では過疎化が進み、町が消滅する危機に瀕している。これは我が国の食料自給率の観点からも重大な問題である。これを脱却するためには、地方の一次産業従事者が幸福になること、そしてそれが社会に認知され一次産業が子供達のなりたい職業の上位にランクインすることが重要である。我々の拠点では、今後も、100 年も 1000 年も続く豊かな食のまちを実現するため、あらゆる人々と協働し、総合知でこの課題に取り組んでいく。